とある魔術と科学の召喚獣

AKATUKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術と科学の召喚獣

【Ｎコード】

Ｎ３７６８Ｒ

【作者名】

ＡＫＡＴＵＫＩ

【あらすじ】

この物語は、とある科学ととある魔術そしてバカテスの混ざった物語です。注意魔術側から出る人は、かなり少ないです。そして原作では、年が違う人も同い年になっています。

プロローグ（前書き）

初投稿なのであまりうまくは、ありませんが見てください

プロローグ

朝、「不幸だーーー」誰かから逃げる少年
「待ちなさいよアンタ」電撃を放つ少女
「朝から幸せそうだね二人とも」笑う少年
「これが幸せに見えるか明久」
「いやー当麻御坂さんは、幸せそうだよ」
「ビリビリそれ以上レールガンを打つなー」
「ビリビリ呼ぶなー私には、御坂美琴とゆうちゃんとした名前がある」
「俺にもアンタでは、なく上条当麻とゆうちゃんとした名前がある」
「うるさい」御坂は、レールガンを放つ
「俺には拒否権は、ないのかーーーー」
「当麻頑張ってて僕のところに来るなーーー」
「明久大丈夫だ俺には、この右手がある」
パリン当麻の右手によりレールガンは止まった。
「なんでアンタには、効かないのよ」
「上条さんには、イマジンブレイカーとゆう異能の力なら神の鉄槌も効かない右手があるんだもん」
「「だから不幸なんだろ」」と明久と御坂にいわれたそして時計見て
「不幸だーーーーー」
これがこの物語の幕開けである。
完

プロローグ（後書き）

書いてみるとかなり難しいことがわかりました。更新は、遅いかもしれませんがよろしくお願いします。

なぜ知り合い（前書き）

もっと頑張りますので見てください。

なぜ知り合い

「遅刻だーーーー」叫んでる少年の名前は、上条当麻今学期転校してきた高校二年生である。もと学園都市の生徒らしい

「当麻の不幸が移ったじゃないか」このひとに罪をなすりつけている少年の名は、吉井明久文月学園生徒で高校二年生である。

「ほらアンタ達速く行くわよ」この少女は、上条当麻と同じ学園都市出身の超能力者である当麻と同じ転校生で名は、御坂美琴高校二年生であるそしてなんと学園都市三位のレベル５レールガンがこの人である。

この三人が出会ったのは、ちょうど一ヶ月前であるその日は、雨が降っていた。

ザーザーザー

この日上条当麻と御坂美琴学園都市を出て転校する学校の下見しに行く日だった。

常盤台高校女子寮

「お姉さまーー」ガサツインテールの子が抱きついた

「ちょっと何すんのよ黒子」この人は、御坂美琴

「お姉さま私も行きますの。」この人は、白井黒子高校一年生御坂と合い部屋

「もう引っ付くなーーアンタは、風紀委員の仕事があるでしょ」バチバチ

「イヤーーーお姉さまの愛のムチ最高」ガタ気絶したようだ

「じゃ行ってくるね黒子」そんなこと無視して御坂は、駅に向った

〜続く〜

なぜ知り合い（後書き）

いや一話で終わらそうとしが無理だったわーーーー

路地裏での出来事（前書き）

久しぶりの投稿です。

路地裏での出来事

ポツポツ傘に雨が当たる。御坂美琴は、路地裏を歩いていた今年から転校する。文月学園の下見に行く途中だ。後輩の白井黒子達は、前日に下見に行っていたので今日は、一人だ。

「はー面倒だな転校なんて何でレベル５の私が外で活動しないといけないのよ」

御坂たちが外に転校しないといけない理由は、簡単だった最近外に出て超能力を使い暴れる連中が増えているらしいだから風紀委員の白井黒子たちやレベル５の御坂美琴などが外に転校するらしいもちろん警備員として教師達も外の学校へ移るらしい。そんなことを考えてると前から変な集団が現れたスキルアウトだこの集団は、無能力者たちでこの時代の不良どもである。回りには、一般人がいるけど誰も止めない

「ねぇ君僕達と遊ばない」「いつ帰れるかわかんないけどよーー」

「（私に声をかけるなんてバカな連中ねぇ決して彼らが悪いわけじゃないこんな中にわって入って何か出来るわけじゃないし結局けがをするだけだ誰だって自分がかわいいそれが普通見ず知らずの人のためにそんなことするやつがいたらそいつただのばかか）」

「ああいたいた自分の連れがお世話になりました」

ツンツン頭の男が現れた

「だめだろ勝手にはぐれちゃー」

そういって手を握り

「じゃあどうもありがとうございました」

「誰よアンタ」

一瞬であたりが静まり返った

「おまえうまく合わせろよ知り合いふり自然にこの場から抜け出す作戦が台無しだろ」

「なんでそんな面倒なことしないといけないのよ」

「おい兄ちゃん調子こいてじゃねぞ」「こんなことしてただですむと思うなよ」

「なんか文句でもあんのかよ」

「えっとあはははは」

「はぁしかたねぇあああるよ恥かしくねえのかよお前ら女の子こんな大勢で囲んでなっさけねぇ」

「（へぇーーー）」

「大体お前らの囲んだ子の行動よくみてみろよ品の無い行動に初対面の人にいきなりアンタとか言うんだぜ」

「（プチ）」ビリビリ

「見た目は、お嬢様でもまだ反抗期も抜けてないやつだぜ俺は、なぁ群れなきゃこんなやつをあいて出来ないやつらは、むかつくんだよ」

「私が一番むかつくのは、」ビリビリ

「お前だーーーーーーーー」ズガーン

「ぎゃぁーーーーーーーー」どかどか

「ふん」パリーーン

「お前俺を殺すきかぁーーー」

ツンツン頭の少年は、無傷でたっていた

「（何でこいつ無傷なの）」

～続く～

路地裏での出来事（後書き）

長かった

幻想殺しと超電磁砲と吉井明久（前書き）

頑張ります。

幻想殺しと超電磁砲と吉井明久

「ちょっとアンタ待ちなさいよ」ビリビリ
御坂は、電撃を放つしかしツンツン頭の少年が右手を突き出し電撃にぶつけるとパリーンと消えてしまう。

「いい加減にしろ何回電撃放てば気が済むんだ今日は，文月学園の下見にいかなきゃなんねのに不幸だ」

「あれアンタもじゃあちょうどいいやどうせ最後まで一緒にいると思うから一緒にて」

「じゃあさようならビリビリ」タッタッタ

「誰がビリビリだって逃げんな」ビリビリ

3時間後
結果的に一緒に来てしまい下見の帰り

「へーーー幻想殺しねぇ」

「ああそうだだからお前の電撃でも超電磁砲だって神様の奇跡でも消せますよわかったかビリビリだから電撃はもう打ってくるなってなぜビリビリしていらしゃるのですか」

「私には、御坂美琴って名前があるて行ってんでしょうがーーーー」
ビリビリ

「やめろ右手で消せるといってもものすごく怖いだぞ」パリーーン

「ハーハーハーハあたりなさいよこのバカ」
「おまえも俺をバカって呼ぶんだからビリビリでいいじゃあねえか」
「うるさい大体アンタの名前知らないのよ」
「ああそういえばそうだった俺は、上条当m」ズガーン
「「何だ今のは、」」
「「行ってみよう」」
路地裏では、不良どもに囲まれる吉井明久がいた
「あの君たち何の恨みがあって」
「うるさい」ボン
手から炎が放たれた。
「うわ何が起こったんだ炎が手から出たいったい何が」
「俺は、瞬間発火レベル４だ」
「なぜ能力者がここに学園都市から普通は、出れないはずなのに」
「俺達は、スパイラル学園都市から抜け出した能力者の集団さ」
「早速殺しましょっか」ボン

「やめろやめてくれ」
「おいおい何やってんだよお前ら」パリーン
「運が悪かったわねレベル５のレールガンに出くわすなんて」ビリビリ
二人組みの少年少女が現れた
「レールガンだと」「レベル５だ」「あの男何もの何だ炎を消しやがった」
「ビリビリここ頼んでいいか」ビリビリ
「ＯＫアンタ速くそいつ連れて行きなさい」ビリビリ
そういって御坂は、もうほぼ全員倒していた
「後は、アンタ一人ね」
「何をいっているまだ２人いるぜ」
「なにをがは」
御坂は、何かに殴られたしかしなにも見えない
「空間移動が遠くから移動してお前に攻撃する」
「あいつは、レベル４だからなかなり遠くから来るからなお前のレーダーにかからない」
「お前は、もう終わりだやれ」

御坂の後ろに鉄パイプを持った男が現れたその瞬間御坂は、終わりだと思ったしかしドンと音がした

「ビリビリ大丈夫か」
ポンと頭に手を乗せられた

「だだ大丈夫に決まってるでしょ／／」
頬赤くなる御坂は、思った

「（なんかこいつヒーローみたい／／）」

「おお無事でよかったぜ」
さらに笑顔を見せられさらに赤くなった

「（かっこいい／／）」

「瞬間発火てめぇがこれ以上御坂を傷つけるならその幻想をぶち殺す」

「てめぇその右手もう使いものにならねぇだろ」
そう右手で鉄パイプを受け止めたからだ

「アンタグスその右手ヒグ」
思わずその右手を見て泣いてしまった。右手は、青く腫れていた

「私のせいでグスアンタの右手が」ポン
とまた手を乗せられた

「大丈夫このぐらいなんとも無いさ」

「でも私のせいで」ナデナデ

「俺は、大丈夫大体こんなに素直で人のために泣くことが出来るやさしいかわいい女の子を守るためだったんだから泣かずに笑顔を見せてくれ」

「うん／／」

とても美しい笑顔にツンツン頭の少年は、赤くなった

「ああそういえば言うの忘れてたは、俺は、左手にも持っているんだぜ」ビリビリ

そういって電撃を全身からだし瞬間発火をしとめた

～続く～

幻想殺しと超電磁砲と吉井明久（後書き）

長かった

警備員と風紀委員（前書き）

頑張ります。

警備員と風紀委員

「ちょっとアンタ今いったい何をやったのちょっと倒れないでよ」
ドス
ツンツン頭の少年は、倒れたその後に後ろに人が現れた。

「風紀委員ですの」
ツインテールの白井黒子が現れた。

「あれお姉様じゃありませんかとゆうことは」
白井は、後ろを振り向くとたくさんのスパイラルがいた

「お姉様また一般人なのに手を出したのですか何度言ったらわかるんですの」

「黒子そんなことよりもこいつを」
御坂は、ツンツン頭の少年を差し出す

「この殿方は、まあ右手が完璧にやばいですね速く連れて行きましょう。」
白井は、ツンツンの少年に触れると

「あれなぜですのテレポートが効かないですの」
そんなことしてる間に

「警備員じゃん」
数人の黒い服が現れた

「あれ白井にレールガンそれに小萌のとこのガキじゃん」

黒服の隊長が言った

「知ってるんですか黄泉川先生」

「この殿方私の能力も使えませんの」

「知ってるも何もうちの学校の生徒じゃん」

「では、速く連れて行きましょうお姉様も病院で見てもらいましょう」

「通報してくれた高校生も連れてくじゃん」

3時間後ある病室で

「スゥースゥー」

御坂は、ツンツン頭の少年を見ていた

「（寝てる顔なかなかかわいいじゃない）」

そおとちかずくとその場にあったいすでベッドにダイブした。

「・・・・・／／」ドキドキ

その瞬間ツンツン頭の少年は、目覚めた

「何やってんだビリビリ」

「えええっとその／／」もじもじ

「おおそういえば怪我あんまりねえな」

「うんそういえばあの時その守ってくれてありがとう／／」

「おお／／」ドキドキ

「「・・・・・／／」」

その瞬間がっちゃと扉が開いた

「失礼します」

そのとき運悪く明久が入ってきた

「「・・・・／／」」

見詰め合ってる二人をみて

「・・・・・・」

「お邪魔しました」

がっちゃと扉を閉めた

「「誤解だーーーー」」

その数分後

「僕吉井明久といいます高校2年生ですさっきは、ありがとうございました。」

「私御坂美琴といいます高校2年生ですあのさっきのは／／誤解ですから／／」

「僕上条当麻と言います／／」

「「あの／／」」

「（なぜタイミングよく）」

「（このバカあわせてるのか）」

「そう言えば吉井は、文月学園の生徒なのよねぇ」

「そうなのか明久じゃあ俺達また会うかもな」

「君たちが学園都市から来る生徒なのじゃあこれからもよろしく」

「「よろしく」」

これが三人の出会いであった

～続く～

警備員と風紀委員（後書き）

疲れました。

クラス発表と痴話喧嘩（前書き）

更新おくれました。

クラス発表と痴話喧嘩

「やっとついたハー毎日こんなことしながら学校に来るのか不幸だー」

「アンタ毎日この御坂美琴様と通えるのに不幸だというの」

「そうだよ当麻幸せじゃないか」

「まったくどこが幸せなんだ明久毎日電撃食らうと考えると夜も怖くて眠れないじゃないか」

「ねぇアンタ本気でいってないよねぇ」バチバチ

「あれなんで御坂さん怒っていらっしゃるのですか」

「自分で考えろバカ」ビリビリ

「だー不幸だー」

「何をやっている吉井」

「おはようございます鉄じｎ・・西村先生」

西村鉄人・・・通称鉄人

トライアスロンが趣味な補修講師

「この人誰だ御坂」

「知らないは、よ」

「おおこれは、学園都市の人でしたかえっと確かレベル５レールガンでしたか君らは、勉強のために来たんだっけ」

「御坂美琴です」

「上条当麻です」

「では、これを」
封筒を渡されたこの文月学園には、２年生になると振り分け試験があるＡＢＣＤＥＦと学力順に分けられ成績がいいとＡクラス悪いとＦクラスと分けられるそしてＡクラスにもなると飲み物飲み放題や一人ひとつのエアコンやパソコンなどそしてシステムデスクなどもついてくる。

「「Ｆクラス」」
御坂や上条明久までも驚いていた

「どうゆうことですか西村先生」

「不幸だ」

「君たち二人は、この前の痴話喧嘩で機材をたくさん壊しただから問題児と扱われＦクラス行きだ」

「何を言ってるんですか痴話喧嘩なんて私たちまだ付き合ってません／／」

「おーい御坂まだがいらないぞ」

「何いってんのそんな事言ってないは、よ」
「おいいってたろ確実に」
「いってないよね」バチバチ
「はいいっておりません美琴様」
「美琴って呼ばれたあいつに呼ばれた／／」
「御坂さん」
「ふにゃぁぁぁーーーーーーー」ビリビリ
「やめろ」ポン
電撃は、とまった
「まったく」ナデナデ
御坂は、そのまま幸せそうに眠っている
「そして吉井俺は、お前の事を馬鹿なんじゃないかと疑っていた」
「失敬な僕は、なんかじゃないぞ」
と乱暴に明久は、封筒をとった
「喜べ吉井」
「Fクラス」
「お前は、正真正銘のおおバカだ」

「おい御坂ついでに明久現実を見て目覚めろ」
上条は、どうやらFクラスとゆう現実をみて倒れたとおもっている。

「とうま」

「何で寝言でおれの名前が」
現在上条は、御坂を膝枕中明久は、立って固まってる

「私とうまが大好き」

「な・・／／俺も御坂が好きだけど」
御坂が目開いた

「今度映画に連れていきなさいついでにクレープもおごりなさい／／」
御坂は、顔を真っ赤にしながら行った

「えそれは、デートの誘い」

「さっさと教室行くわよ」

「ああ」

「明久置いてくぞ」

「ああそういえば学園都市の人間は、全員同じ学年だからなそしてあとから何人も入ってくるから」

「えええええ」

〜続く〜

クラス発表と痴話喧嘩（後書き）

がんばります。

嫉妬で巻き起こる戦い（前書き）

更新遅れました。

嫉妬で巻き起こる戦い

「なぁ御坂常盤台の教室もこんなすごいのか」

「ここまでは、凄くないと思うけど」

Aクラス・・・説明は、前回したので省く

「明久これだったらFクラスも期待できそうだな」

「そうだよねそうだそうだ期待しようFクラスでも期待しよう」

「てか御坂もしものときは、学園都市に頼んで元の学校に戻ろう」

「ねぇアンタは、Fクラスがそんなに嫌なの私は、結構楽しみだけど」

「うんでも御坂お前無理するなよ常盤台のお嬢様には、予想も出来ないほどつらいと思うから」

「そしたら助けてくれるよね」

「ああもちろん俺は、お前のずっと味方だから」

「ありがと」ニコ

「ああ」ドキドキ

Fクラス前

「これは、酷い」

「だだ大丈夫よね吉井」ガタガタ

「御坂今の明久になにを言っても無駄だ」

「じゃあ行こうか」がら

「「おはよう上やん」」

「あれ青髪に土御門もFクラスなのか」

「こいつら誰とと当麻」

「ああこいつらは、前の学校のクラスメートだそして忠告しとく青髪には、絶対近づくな危険だあれそういえばなぜ当麻さっきまでアンタってずっといってたのに」

「「かみやんまたフラグたてたのか」」「「Fクラスの野郎どもこいつは、上条当麻世界最低のフラグ男（だにゃー）」」

「当麻に手を出すな」バチバチ

「「やつは、常盤台の超電磁砲みんな逃げろー」」

「ありがとな御坂」なでなで

「ふにゃー」

「「くそフラグ男」」

「「今は、見逃しておこうあとで覚えてろよ」」

嫉妬で巻き起こる戦い（後書き）

すみません

小さい先生（前書き）

頑張ります。

小さい先生

「（なぜ私吉井明久は、Ｆクラスになってしまったのだろうか確かに僕は、バカだしかし１０問に１問は、解けたはずだ）」

「まあ今は、悩んでいても仕方が無い行くぞＦクラス」がら

「これは、ひどすぎる」

床は、痛んだ畳・机は、ぼろぼろの卓袱台

「うるさいぞばか」

「雄二そこで何をしてるの」

坂本雄二・・・明久の悪友さかだった赤い髪の毛をしている

「担任が来ないから俺が変わりに教卓に立っていた」

「へぇーそうなんだ」

明久は、雄二の言っていたことを軽く受け流し空席を探す

「こっちじゃ明久」

名前を呼ばれたほうを見るとそこには、見た目は、美少女なのに男性用の制服を纏った明久の友人がいた

「おはよう秀吉」

「おはようなのじゃ明久」

木下秀吉・・・その見た目は、美男子美少女と性別を間違えらても

おかしくない
演劇部に所属
秀吉の周りには、まだ空席が残っていたその近くには、雄二の物と思われる鞄がおいてあった。
「あれ御坂さんどうしたの」
美琴は、なぜか当麻の方向いてもじもじしている。
「ああそうか当麻、御坂さんは、当麻の隣に座りたいみたいだよ
「御坂そういえば知り合いがこのクラスにいないもんなよし」ぎゅ
手を握り動く
「ふぇ」
美琴は、真っ赤になりながらついていく
「よしここでいいか」
秀吉の近くに座り
「秀吉だっけおれは、上条当麻よろしく」
「私は、御坂美琴よろしく」
「よろしくなのじゃ」
「当麻」ガクガク
「どうした御坂震えて」

「床に変なのがいる」

「なにしてだ」

上条は、少し怒り気味にいった

「畳の匂いを味わっていた」

真顔でうそをついた

土屋康太・・・通称ムッツリー二

「よしまず鼻血を拭いて御坂に謝れくそまだ俺だって見たこと無いのに」

「アンタは、何いってんのよ」バチバチ

そのときちょうどよくスカートがめくれた

「短パンはぁーお前期待はずれにもほどがあるだろ」パリーン

「／／／／」

そのときちょうどよく扉が開いた

「はいはいみなさん席についてください」

そしてまだ小学生と言えるような少女が入ってきた

小さい先生（後書き）

疲れた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3768r/

とある魔術と科学の召喚獣

2011年10月8日18時42分発行